

発達 8-PC6

幼児における学習情報の新奇性の認識

齋藤 瑞恵

(お茶の水女子大学人間文化研究科)

【問題】

知識や記憶の源についての帰属過程はソースモニタリングと呼ばれる。このソースモニタリングによって、イベントについての知識は色づけされ、知識や記憶の発達やその表出に影響を与えることから、ソースモニタリングの重要性が指摘されている(e.g., Johnson,哈shtroudi, & Lindsay, 1993)。幼児のソースモニタリングについては、就学前に発達することが示されてきた(e.g., Astington & Flavell, 1992)。

ところで、ソースモニタリング、特に学習が生じたことを認識しそれを知識源として記憶するためには、まず第1に与えられた情報が新奇なものであることを認識しなければならない(学習情報の新奇性の認識)。Taylor, Esbensen, Bennett(1994)は、特に4歳児は学習が生じた際に、学習情報の新奇性を認識できないことを示した。そこで本研究ではTaylor et al.(1994)の追試として、3・4・5歳児について、学習起時の学習情報の新奇性の認識を検討した。この際、年少児も直接的な指標には現れなくとも潜在的には学習情報の新奇性をモニタリングしている可能性があるため、直接的指標に加え、選好指標を取り入れ間接的に潜在的なレベルでの新奇性のモニタリングも検討した。

【実験】

〔方法〕 **被験者** 3歳児11名、4歳児36名、5歳児21名 **材料** 幼児の好みが偏らない道具。なじみ刺激「はさみ」「ほうき」「ワイヤン」、新奇刺激「かんな」「イセツル」「コンパス」事物絵かくと道具使用状態の絵かく2枚1組。 **手続き** I学習: ①練習施行: 事物名質問→機能(使用法)質問②な

じみ刺激: 事物名質問→機能質問③新奇刺激: 事物名質問→事物名・機能説明→理解確認(②③はカウンターバランス) II課題: ④直接的指標: なじみ刺激・新奇刺激各々について質問「今日初めて知ったの?」「前から知っていたの?」⑤間接的指標: なじみ刺激・新奇刺激両方について選好質問「どちらが好き?」「どちらで遊んでみたい?」(④⑤質問順序、④⑤順序はカウンターバランス)

〔結果と考察〕 **1. 直接的指標(図1)** 分散分析の結果、年齢の主効果が有意であり($F(2,65)=5.23, p<.01$)、5歳児は3・4歳児より学習情報の新奇性を意識的に認識していることが示され、Taylor et al.(1994)を追認した。直接的指標に示される学習情報の新奇性を認識する能力は4・5歳を境に発達していく可能性が示された。

2. 間接的指標: 選好(図2) なじみ刺激選択率を従属変数、直接的指標における認識正答率と年齢を説明変数とした傾向分析を行った結果、直接的指標の認識正答率の2次の効果のみが有意であり、騒音刺激選択率との間の曲線相関が示された($\beta=0.401, t(63)=2.75, p<.01$)。ここから直接的指標では学習情報の新奇性の認識が非常に低いとされた幼児は、なじみ刺激をより偏好することが明らかにされた。直接的に認識を問う指標では学習情報の新奇性を認識していないとされた幼児も、潜在的には新奇性をモニタリングしていると言える。

今後、間接的指標において示された新奇性のモニタリングから、直接的指標において示された新奇性の認識への発達の実体について、さらに研究が必要があると考える。

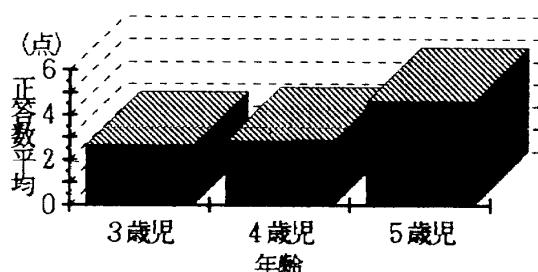


図1 情報新奇性の意識的認識 平均点

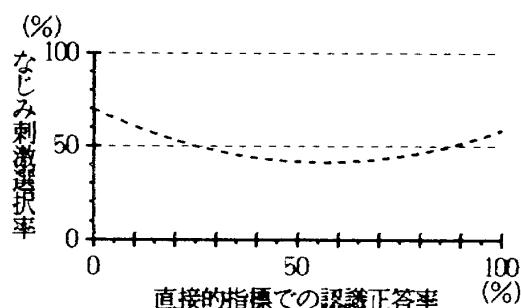


図2 直接的指標での認識正答率と選好の関係